

非文字資料研究センター主催

「帝国日本」の残影 海外神社跡地写真展

期 間：2019年7月31日（水）～8月4日（日）

開場時間：10：30～17：30

会 場：横浜市民ギャラリー 1階展示室

関連イベント

○ギャラリートーク

8月3日（土）14：00～

中島三千男（非文字資料研究センター客員研究員、神奈川大学名誉教授）

稲宮康人（非文字資料研究センター研究協力者・写真家）

○展示解説

8月4日（日）14：00～

稲宮康人（非文字資料研究センター研究協力者・写真家）

この展示は、以下の財団の助成を受けて実施されました。

公益財団法人 アサヒグループ芸術文化財団

公益財団法人 花王芸術・科学財団



図1 展示チラシ（表・裏）



図2 会場全体の様子1

「帝国日本」の残影 海外神社跡地写真展について

稲宮康人（非文字資料研究センター研究協力者）

はじめに

「『帝国日本』の残影 海外神社跡地写真展」（非文字資料研究センター主催）を2019年7月31日から8月4日まで、横浜市民ギャラリー1階展示室で開催した（図1）。この展示会と連動して、『非文字資料研究叢書2「神国」の残影 海外神社跡地写真記録』（稲宮康人、中島三千男著）を出版する予定だったが、本は出版がずれ込み（2019年11月25日出版）、展示のみとなった。展示会は、幸運にも「アサヒグループ芸術文化

財団」「花王芸術・科学財団」の両財団から展示助成を受けることができた。

写真展は2008年に立ち上げた共同プロジェクト「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」の成果を踏まえたものである。当該プロジェクトでは、これまで「帝国後 海外神社跡地の景観変容」（2012年）、と「海外神社とは？ 史料と写真が語るもの」（2014年）の2回の展示会を開催してきた。今回の展示は、北朝鮮（2014年）やフィリピン（2015年）、インドネシア（2016年）での調査結果や、稲宮の10年間にわたる撮影成果をもあわせ、大日本帝国の勢力下におかれたことがある国・地域の海外神社跡地について概観することを試みたものである。また、写真とあわせて史料の展示も行い、海外神社の実態についても伝えることができ



図3 会場全体の様子 2



図4 写真左下に過去写真、その右上は神社データ、右下が解説



図5 鳥居だけを並べた壁面。図3の左奥を拡大



図6 本殿跡地だけを並べた壁面

るよう心掛けた。

展示会は5日間という短期間の展示であったが、『毎日新聞』夕刊(7月31日)や『神奈川新聞』(8月2日)に記事がでたことなどもあり、全日程を通して673人の来場者があるなど、企画段階の想定を超える反響があった。8月3日(土)には中島三千男と稲宮康人がギャラリートークを行い(図13)、235人が来場した。また、4日(日)にも稲宮が展示解説を行い195人の来場者があった。展示終了後ではあるが、展示内容を報告する記事が仏教タイムス(8月15日、22日合併号)や中外日報(8月23日)に掲載された。

*

以下簡単に展示内容について紹介しておきたい。

今回は、展示スペースが広いこともあり、全体を3つに分けて構成した。写真が主たる展示であるが、あわせて史料展示、史料を複数組み合わせた解説パネルを使った展示を行った。また、簡単な海外神社の解説及び大日本帝国の領域を一望できる地図を掲げた。さらに、

展示内容などをまとめた簡単な冊子(12頁)の配布を行った。

■写真

110 cm×100 cm、100 cm×80 cm、のサイズに引き伸ばした写真を展示の中心にした。110 cm×100 cmサイズの写真が10枚(図2)、100 cm×80 cmサイズの写真が24枚(図3)である。前記サイズに決めた理由として、跡地の写真は全て4×5インチの大きさのカラーネガで撮影しており、このネガには目で見るよりも精緻に風景が記録されている。よって、大きく引き伸ばしてこそネガの潜在力を引き出すことができる写真になる、と考えたからである。基本的に本に掲載した写真の中から選び、なるべく多くの地域を見せることを意識しながら、写真が絵的に連なってゆくように配置した。跡地と神社の繋がりを示すために、跡地写真と共に、当時の絵葉書や写真、神社名・住所などのデータ、100字程度の説明パネルを配置した(図4)。また、



図7 ガラスケースでの史料展示

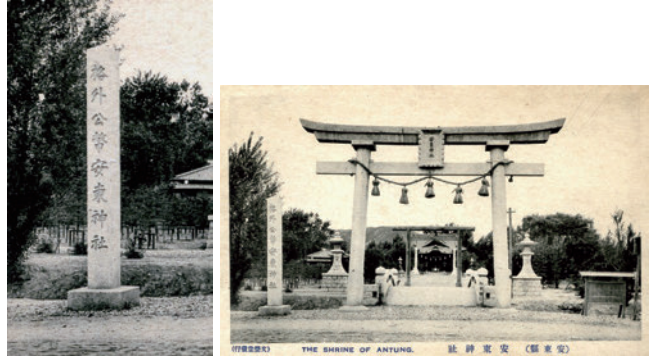


図8 安東神社絵葉書（津田コレクション）及び社号標部分拡大図



図9 史料パネルで構成した壁面



図11 解説パネルと写真を組み合わせて展示した壁面

少し小さい 50 cm×40 cm サイズの写真を 14 枚プリントした。こちらは意味を重視した展示とし、様々な国や地域に残っている鳥居（図 5）や、本殿跡地（図 6）を比較し、跡地の残り方が一様ではないことを示した。

■史料

現物史料として、非文字資料研究センター、中島三千男、津田良樹が所蔵する戦前の書籍や雑誌、絵葉書を展示した（図 7）。今回の展示のために史料を見直す中で、安東神社の社号標に「格外公幣」と刻まれていることが判った（図 8：葉書は市街地にあった第 1 次の神社のものと思われる。神社は後に市郊外の山の中腹に移転している）。史料の複製展示として、仲家が所蔵している海外神社図面から新郷神社の図面を 3 枚展示した。また、各地域の神社の境内の様子がわかる絵図や設計図などを展示した（図 9）。複製史料の多くは 2014 年の展示のために作ったパネルを再利用したが、北京神社計画図は今回が初めての展示であった。

■解説パネル

各地域の代表的な神社の 1940 年以降の動向を解説するパネルを作成した（図 10）。地図や航空写真と複数の過去写真を組み合わせ、市街地のどこに神社が位置していたのかなどを示し、さらに新聞記事なども使って、あまり知られていなかった時期の海外神社について判りやすく解説することを試みた。以下、各パネルの概要を記すと、台湾：航空写真から見る台湾神宮・台湾護国神社用地の使われ方の変遷。満洲：建国神廟の郊外移転について。朝鮮：扶餘神宮造営について。樺太：紀元二千六百年記念の樺太神社新社殿及び外苑造営について（図 10）。南洋：南洋神社創建と外苑について。中国：1944 年末期の上海神社造営計画について。であった。解説パネルは大きく引き伸ばした写真とセットにして展示した（図 11）。スペースの都合から、香港神社は完成予想図のみ。鎮南神社は、過去写真と跡地写真を同サイズに引き伸ばして展示した（図 12）。

*

榊太神社

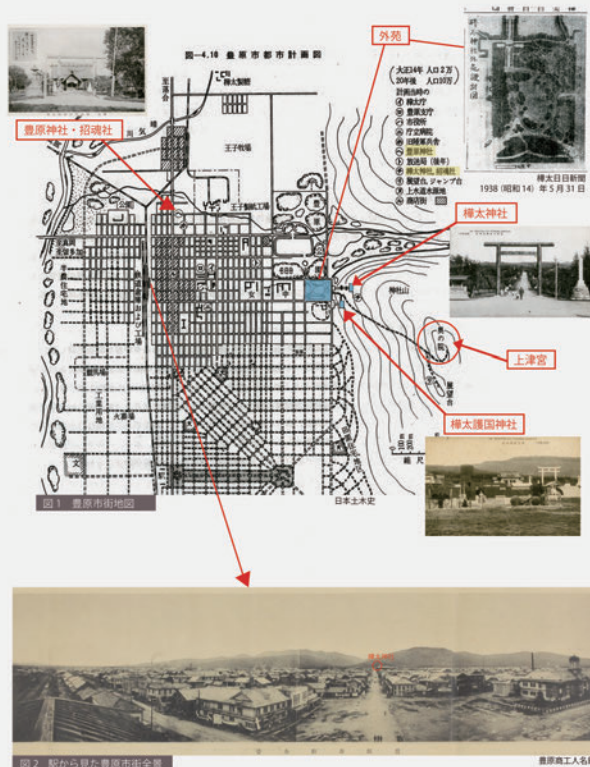


図10 解説パネルサンプル（榊太神社解説パネル）



図12 鎮南神社の過去と現在

おわりに

最後に展示会の反響や会場でのアンケート結果などを踏まえ、展示会を開催しての感想をまとめておきたい。

海外神社というまだあまり世の中に知られていないテーマについて、写真・史料を使った総合的な展示を行ったことを好意的に評価した人が多くいたことがわかった。来場者の中には、戦前の海外神社を実際に体験していた人もおり、青島神社境内で教科書を配布していたことや、



日露戦争の結果、サハリン島の北緯 50 度以南が日本領榊太になった。1911 年豊原市街東方に位置する旭ヶ丘の中腹に榊太神社が鎮座した。1915 年に日露戦争・榊太占領戦の死者を祀る招魂社が創建された。1935 年招魂社は豊原神社境内から、榊太神社の隣接地に移転した。1938 年、紀元二千六百年記念の榊太神社外苑造営を決め、同時に旭ヶ丘山頂近くの奥の院に新たに上津宮（神籬）（図 3）を設置した。翌年から外苑造営が始まり、榊太全島から動労動員（図 5）がなされたが、結局完成しなかった。同時に、榊太神社の新社殿造営（1946 年完成予定）もあり、（図 4）、1942 年 5 月に地鎮祭を行ったが、進行具合は不明。榊太神社跡地には、灯笼基壇・階段などが残っている。写真は本殿があった場所で、左奥に湧水を汲む小屋があり、その上方にコンクリート製の神器庫がある。



図13 盛況だったギャラリートーク

戦後の抑留中、鞍山神社があった神社山で共産党軍と国民党軍の戦闘を目撃した話など、を聞くこともできた。2008 年から 2016 年まで行った、「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」の集大成の展示として相応しいものにすることができたと考えている。